

島根原子力発電所新規制基準適合性審査に係る
敷地周辺陸域地質調査地内埋蔵文化財調査報告書

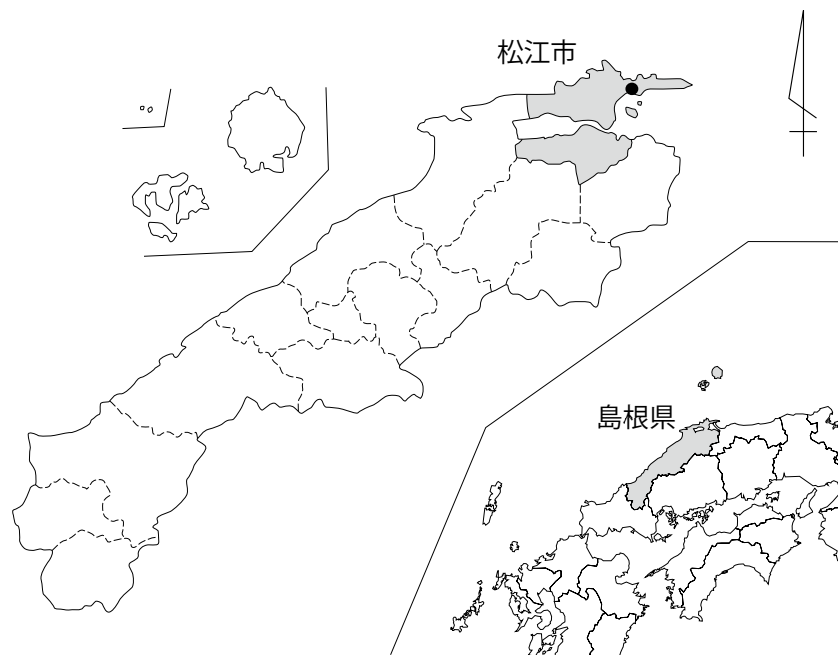
立ヶ袋遺跡

平成28(2016)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

島根原子力発電所新規規制基準適合性審査に係る
敷地周辺陸域地質調査地内埋蔵文化財調査報告書

立ヶ袋遺跡



平成28(2016)年3月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

例 言

1. 本書は、平成 26 年度に本調査を実施した島根原子力発電所新規規制基準適合性審査に係る敷地周辺陸域地質調査地内埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書の作成は、平成 27 年度に中国電力株式会社島根原子力発電所から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。
3. 遺跡の名称・所在地、調査面積は以下のとおりである。

名 称	立ヶ袋遺跡 <small>たちがあふくろいせき</small>
所在地	島根県松江市美保関町 259-1、260 <small>しまねけん みほのせきちょう</small>
調査面積	184.3㎡

4. 現地調査の期間及び報告書作成期間

平成 26 年 9 月 11 日 (立会調査)

平成 26 年 9 月 17 日～平成 26 年 9 月 26 日 (本調査)

平成 28 年 1 月 4 日～平成 28 年 3 月 31 日 (報告書作成)

5. 各年度の調査組織

[平成 26 年度] 発掘調査業務

依 頼 者	中国電力株式会社島根原子力発電所	所 長	北野 立夫
主 体 者	松江市教育委員会	教 育 長	清水 伸夫
実 施 者	松江市歴史まちづくり部	部 長	安田 憲司
	文化財統括官 (埋蔵文化財調査室室長兼務)		錦織 慶樹
	〃 まちづくり文化財課	課 長	永島 真吾
	〃 〃 埋蔵文化財調査室 調査係	係 長	赤澤 秀則
	〃 〃 〃 〃	専門企画員	穴道 元
	〃 〃 〃 〃	主 任	川上 昭一 (担当者)
		主 任	青山 賢
		主 任	徳永 隆
		嘱 託	金森みのり、高橋真紀子、 小川真由美、高尾万里子
調査指導	島根県教育庁	文化財課 主 幹	深田 浩

[平成 27 年度] 報告書作成業務

依 頼 者	中国電力株式会社島根原子力発電所	所 長	北野 立夫
主 体 者	松江市教育委員会	教 育 長	清水 伸夫
事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	安田 憲司
	〃 まちづくり文化財課	課 長	永島 真吾
	〃 〃 専門幹 (埋蔵文化財調査室長兼務)		飯塚 康行

	〃	〃	埋蔵文化財調査室	調査係	係	長	赤澤	秀則
	〃	〃	〃	〃	主	任	川上	昭一
	〃	〃	〃	〃	嘱	託	門脇	誠也
実施者	公益財団法人	松江市	スポーツ振興財団	理事	長	清水	伸夫	
			埋蔵文化財課	課	長	曾田	健	
			〃	調査係	係	長	川西	学
			〃	〃	調	査	員	徳永 桃代 (担当者)
			〃	〃	調	査	補助員	原 英誉

6. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構図版の作成は以下の者が行った。

木村由希江

7. 調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から多大なご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

島根県教育庁文化財課 古代文化センター 研究員 稲田陽介

島根県立松江北高等学校 教諭 大谷晃二

大田市教育委員会 教育部 石見銀山課 特任講師 西尾克己

8. 本書の執筆は第1章を松江市埋蔵文化財調査室が、そのほかを徳永が執筆した。また編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て徳永が行った。

9. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

[弥生土器]

松本岩雄 1992 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社

[土師器]

松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相 - 大東式の再検討 -」『島根考古学会誌 第8集』 島根考古学会

[須恵器]

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』 島根考古学会

[奈良・平安時代以降の須恵器、土師器、土師質土器]

島根県教育委員会 2013 「史跡出雲国府跡9 総括編」

10. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。

11. 本書における遺構記号は以下のとおりである。

SB: 掘立柱建物跡 SP: 柱穴 SD: 溝

12. 報告書作成は、遺構図、遺物図は IllustratorCS6(Adobe 社) で浄書し、図版レイアウト、原稿執筆など編集作業は InDesignCS6(Adobe 社) で行った。

13. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

本文目次

例言

第 1 章 調査の概要	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 章 位置と環境	2
第 1 節 地理的環境	2
第 2 節 歴史的環境	2
第 3 章 調査の成果	5
第 1 節 基本層序と遺構面	5
第 2 節 第 1 遺構面	7
第 3 節 第 2 遺構面	9
第 4 章 総括	15

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

島根県・松江市位置図	
第 1 図 島根半島と調査地の位置	2
第 2 図 立ヶ袋遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:25,000)	4
第 3 図 立ヶ袋遺跡調査範囲図 (S=1:250)	5
第 4 図 土層堆積状況図	6
第 5 図 SB01 平面・断面図	7
第 6 図 第 1 遺構面出土遺物図	7
第 7 図 第 1 遺構面 遺構位置図	8
第 8 図 SB02 平面・断面図	9
第 9 図 第 2 遺構面 遺構位置図	10
第 10 図 SD01 平面・断面図	11
第 11 図 第 2 遺構面 SD01 出土遺物図	12
第 12 図 SD02～SD04 平面・断面図	13
第 13 図 第 2 遺構面 SD03 出土遺物図	13
第 14 図 第 2 遺構面遺物包含層出土遺物図	14
第 15 図 立ヶ袋遺跡遺構変遷図	15

挿表目次

表 1. 遺物観察表	17
表 2. 非掲載石器観察表	18

写真図版目次

本文中写真

写真 1. 9月17日の記者公開の様子	1
写真 2. 土層堆積状況(東から)	5

図版 1. 調査開始前状況(南から) 現在の調査地(南から)	図版 5. 第 2 遺構面 SD02 完掘状況(南から) 第 2 遺構面 SB02 完掘状況(南から)
図版 2. 第 1 遺構面 SB01 検出状況(南西から) 第 1 遺構面 SB01 完掘状況(南から)	図版 6. 第 1 遺構面出土遺物 第 2 遺構面 SD01 出土遺物(1)
図版 3. 2 面遺物包含層検出状況(北壁) 2 面遺物包含層出土遺物(第 14 図 -3) 2 面遺物包含層出土遺物(第 14 図 -4)	図版 7. 第 2 遺構面 SD01 出土遺物(2) 第 2 遺構面 SD01 出土遺物(3) 第 2 遺構面 SD03 出土遺物
図版 4. 第 2 遺構面完掘状況(西から) 第 2 遺構面 SD01 完掘状況(南東から)	図版 8. 第 2 遺構面遺物包含層出土遺物

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

中国電力株式会社では、島根原子力発電所2号機の新規制基準への適合性確認審査を受けるため、平成25(2013)年12月25日に原子炉設置変更許可を原子力規制委員会に申請した。新規制基準適合性審査における同委員会の指摘を踏まえ、島根原子力発電所周辺陸域の活断層評価の妥当性を確認するため、地質調査を実施することとなった。

この事業に先立ち、平成26(2014)年5月14日に中国電力株式会社島根原子力発電所所長から地質調査予定地内における埋蔵文化財の有無確認調査依頼書が提出された。これを受け、松江市埋蔵文化財調査室では同年5月21日に対象地13地点の分布調査を実施し、さらに詳細な試掘調査を必要とする地点1箇所、工事にあたって立会調査が必要な地点1箇所を確認した。

当地については、重機の進入が困難であったため、掘削時に立会調査を実施し、万一遺跡が発見されれば緊急調査で対応することとして回答した地点である。本格的な地質調査に先駆けて、平成26年9月11日に部分的な掘削が行われることとなり、これに立ち会ったところ、黒曜石や土師器が出土する遺物包含層を確認するに至った。このため、当地の小字名から「立ヶ袋遺跡」として文化財保護法上の手続きを取り、地質調査を中断して9月17日から本発掘調査を実施することとなった。遺跡の不時発見については9月12日のニュースで速報されると共に、9月13日の紙面においても報道された。また、9月17日の調査開始時には地質調査の現地公開と重なり、大勢のマスコミ関係者に囲まれての調査となった。9月24日に島根県教育庁文化財課による調査指導会を受け、この後に全体写真の撮影と測量作業を実施し、9月26日に現地での調査を終了した。

なお、試掘調査が必要と回答した地点については、6月6日に試掘調査を実施し、遺跡は存在しないことを確認している。

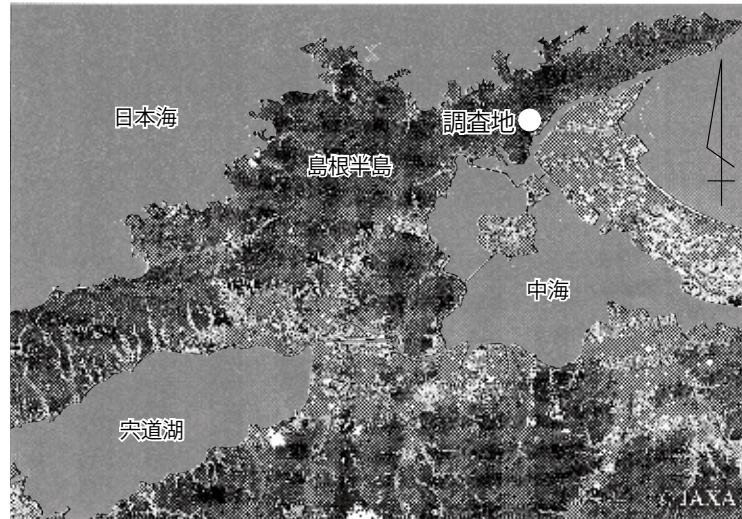


写真1. 9月17日の記者公開の様子

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

立ヶ袋遺跡は島根半島の東側、松江市美保関町森山に所在する。島根半島は東西に400～500m前後の山を含む山脈が広がり、全体として小起伏山地の様相を呈している。島根半島の北岸はリアス式海岸で、脊梁から北方にやや緩傾斜に延びる山地が海に伸びて没しているため、岬や島をつくっている。それに反し島根半島の南岸は、森山地区の大字下宇部で丘陵や沖積地が中海に接して



第1図 島根半島と調査地の位置

いるほかは、境水道、美保湾へも山地が急傾斜で落ちこんでいるため、境水道から美保湾にかけて島はほとんどなく、海岸線は単調である。

立ヶ袋遺跡は島根半島の南岸にある小支谷の西岸、南西向きの丘陵に位置し、遺跡の西側には横田川が流れる。

第2節 歴史的環境

立ヶ袋遺跡周辺の遺跡は縄文時代から存在が確認されている。縄文時代前期から存在する遺跡としては、井尻遺跡(13)、サルガ鼻洞窟遺跡(17)、池の尻遺跡(18)、早田遺跡(20)がある。なかでもサルガ鼻洞窟遺跡(17)は、縄文時代前期後半から中期前半、後期前葉から中葉と幅広い時期の土器が出土しているほか、石鏃、石錘、磨製石斧、石皿といった縄文時代における主要な石器器種がほぼそろって見つかっており、活発な生活の痕跡が読み取れる遺跡である。現在までのところ、竪穴住居跡は見つかっておらず、権現山洞窟遺跡(6)、サルガ鼻洞窟遺跡(17)、小浜岩陰遺跡(26)といった洞窟や岩陰での居住の痕跡が残っている。

弥生時代では、縄文時代から引き続き存在する遺跡がほとんどであるが、このほか伊屋谷Ⅱ遺跡(5)で弥生時代前期の土器が数点採取されている。小浜岩陰遺跡(26)では弥生時代前期から中期の壺や甕片、早田遺跡(20)、井尻遺跡(13)では弥生時代中期の甕が採取されている。サルガ鼻洞窟遺跡(17)では弥生時代後期の甕片が採取されている。

古墳時代は、方墳、円墳、横穴墓がいくつか確認されているものの、発掘調査が行われていないた

め、時期を特定する遺物は発見されていない。このため、古墳の造営年代や主体部の構造など詳細は不明だが、外観できる墳形、露出した石室などから若干の推定はされている。含霊塔上古墳(19)は直径6.3mあまりの円墳で、箱式石棺が露出している。西平古墳群(2)は4基の方墳があり、そのうちの1基が箱式石棺ではないかと推測されている。東平古墳群(3)は2基の方墳と1基の円墳があり、そのうち1基の方墳で箱式石棺が露出している。女男岩古墳(27)は7.6m×6mの円墳である。これらの古墳は5世紀末から6世紀代のものと推測されている。6世紀末から7世紀代の墳墓である横穴墓では、駒喰横穴(16)、殿川内横穴群(23)、女男岩横穴群(28)が確認されている。

製塩土器が大量に採取された伊屋谷遺跡(4)では、7世紀前半代の須恵器も出土している。このほか蕨峯遺跡(9)、関谷遺跡(14)といった製鉄関係の遺跡も見つかっており、関谷遺跡(14)で採取された炭化木をC14年代測定にかけたところ5世紀中頃という結果がでているものの、少量の鉄滓、焼土の採取のみのため詳細は不明である。

奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると当遺跡周辺は島根郡美保郷に属しており、美保郷には関所である戸江割^{とのえせき}が置かれていたことが記されている。森山公民館が刊行した『もりやま』によれば、駒喰横穴(16)近くの字名が「古関」であることから、この辺りを戸江割^{とのえせき}の推定地として挙げている¹⁾。一方、発掘調査の成果としては、7世紀後半から9世紀にかけて存続した尾崎遺跡(22)から加工段や礎盤建物跡が検出されており、「門家」「郷長」などと書かれた墨書土器がいくつか見ついている。「門家」については、「家」の文字が8世紀にはしばしば「宅」という意味を持つ「ヤケ」と読まれており、「ヤケ」は拠点施設を指すため、ここを戸江割^{とのえせき}に関連した官衙遺跡と想定している³⁾。

中世の遺跡は確認されておらず、戦国時代では、権現山城跡(7)、横田山城跡(12)を含めた山野、海上が毛利氏、尼子氏の制海権を巡る合戦の舞台となっている。

江戸時代には、参勤交代に使用される官道は街道、そのほかの主要道は往還と呼ばれるようになり⁴⁾、森山から東へは、現在の国道431号線と重複するように美保関往還(35)が存在した。境水道に面した森山は森山番所跡(11)があったとされる。

註1) この他、この辺りは古くは入江であり、その奥から7・8世紀の須恵器や土師器が採取されることや駒喰横穴が存在することもその根拠となっている。

註2) 吉田孝1983「イへとヤケ」『律令国家と古代の社会』岩波書店

註3) 平石充2009「第4章 総括」『尾崎遺跡』島根県教育委員会、中国電力株式会社

註4) 池橋達雄2006「第3章 美保関、大社への道」『定本 島根県の歴史街道』樹林舎

参考文献

島根県教育委員会2003『増補改訂 島根県遺跡地図Ⅰ(出雲・隠岐編)』

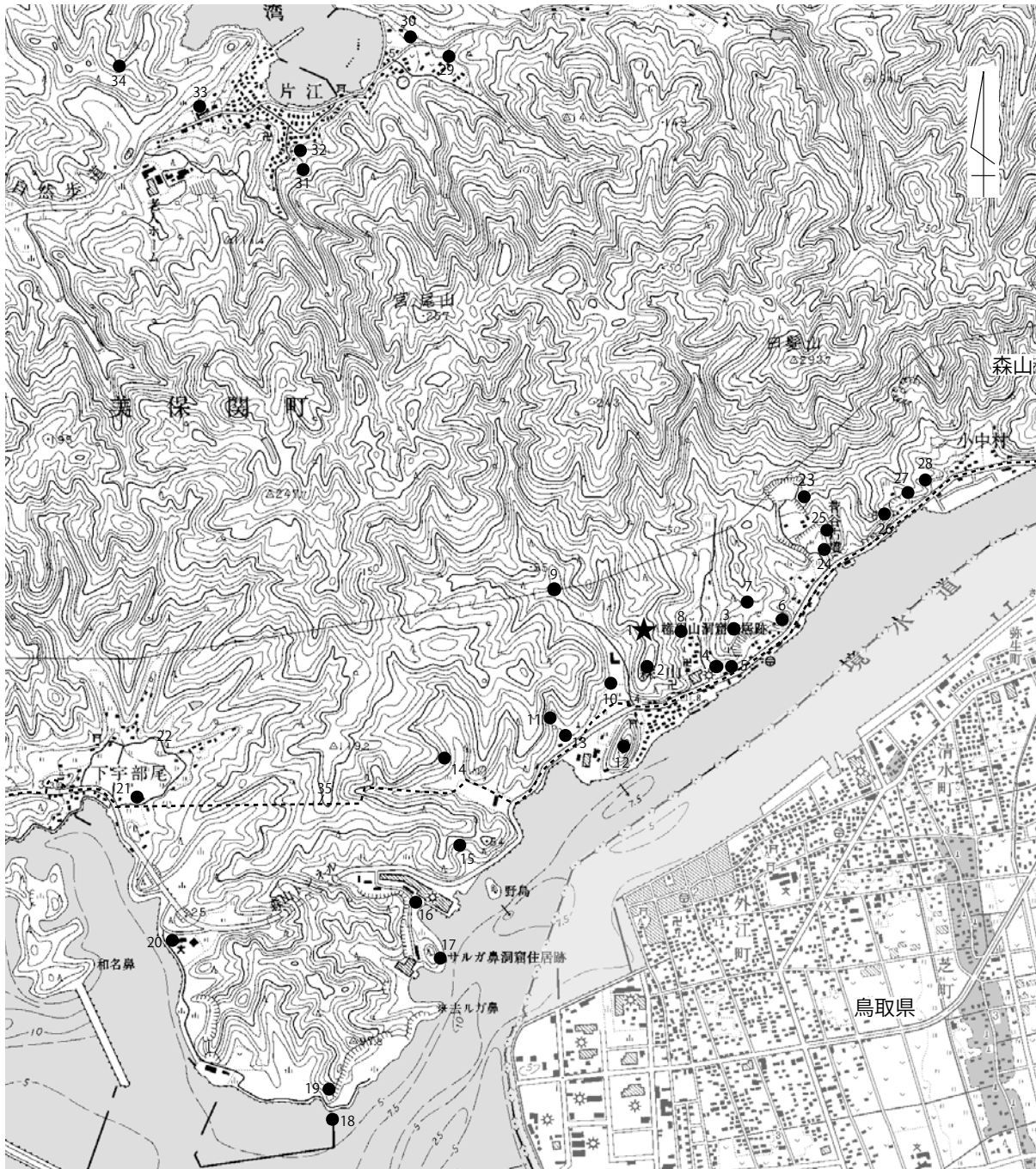
島根県教育委員会、中国電力株式会社2009『尾崎遺跡』

関和彦2006「Ⅲ 嶋根郡条」『出雲国風土記 註論』明石書店

松江市史編纂委員会2012『松江市史 史料編2 考古資料』

美保関町誌編さん委員会1986『美保関町誌』

森山公民館1986『もりやま(創刊号)』



第2図 立ヶ袋遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

- | | | |
|------------|--------------------|-------------|
| 1. 立ヶ袋遺跡 | 13. 井尻遺跡 | 25. 菅谷古墳 |
| 2. 西平古墳群 | 14. 関谷遺跡 | 26. 小浜岩陰遺跡 |
| 3. 東平古墳群 | 15. 野島遺跡 | 27. 女男岩古墳 |
| 4. 伊屋谷遺跡 | 16. 駒喰横穴 | 28. 女男岩横穴群 |
| 5. 伊屋谷II遺跡 | 17. サルガ鼻洞窟遺跡 | 29. 子丸子古墳 |
| 6. 権現山洞窟遺跡 | 18. 池の尻遺跡 (含霊塔下遺跡) | 30. 向畑古墳群 |
| 7. 権現山城跡 | 19. 含霊塔上古墳 | 31. 上谷遺跡 |
| 8. 大田遺跡 | 20. 早田遺跡 | 32. 方結神社浦古墳 |
| 9. 蕨峯遺跡 | 21. 下宇部尾条里遺跡 | 33. 平畑遺跡 |
| 10. 向横田遺跡 | 22. 尾崎遺跡 | 34. 片江横穴群 |
| 11. 森山番所跡 | 23. 殿川内横穴群 | 35. 美保関往還 |
| 12. 横田山城跡 | 24. 菅谷洞窟遺跡群 | |

第3章 調査の成果

第1節 基本層序と遺構面 (第4図)

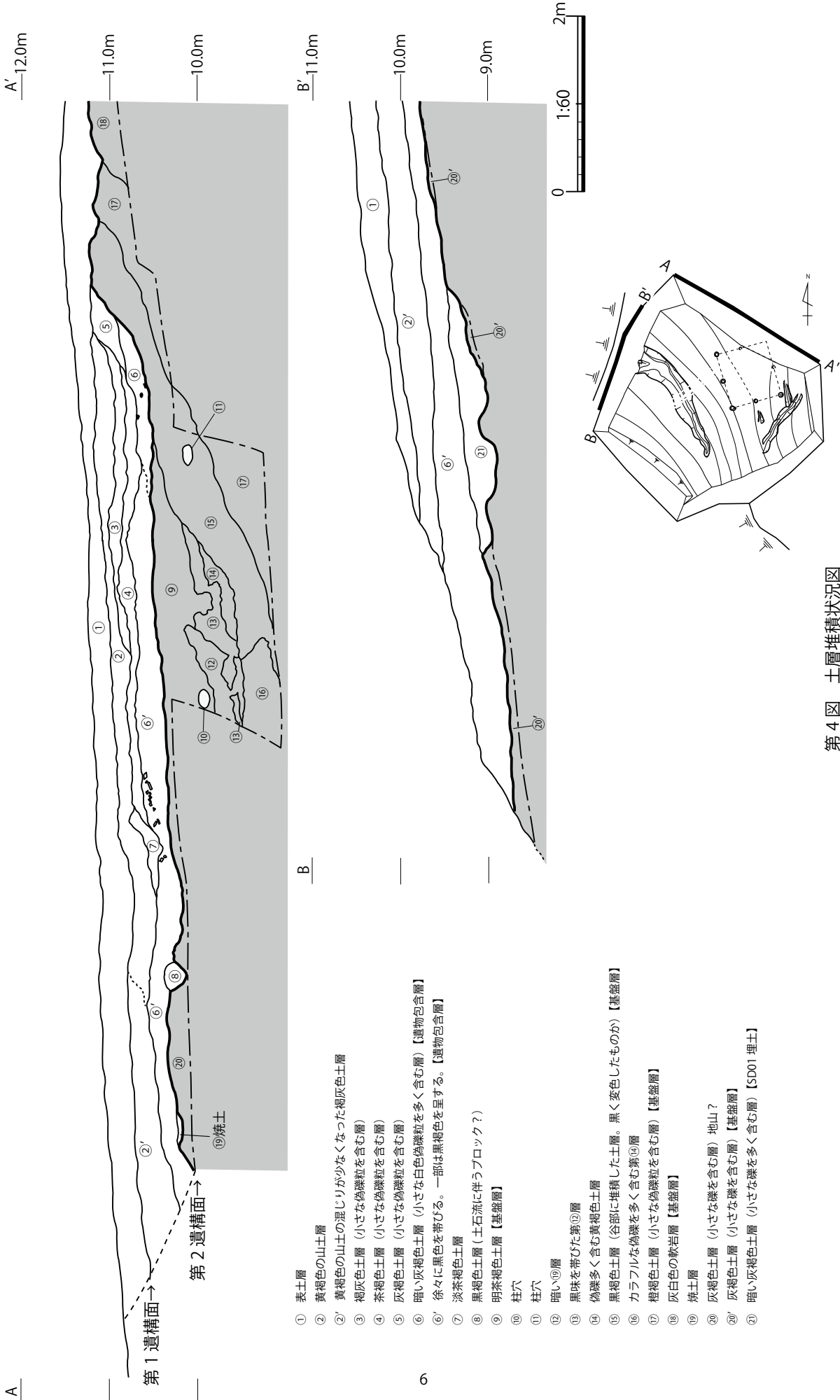
調査地は丘陵下の南西向き緩斜面に位置し、調査区内の現地表面は、調査区北側で標高約10.8～11.6mを測り、調査区南側は標高約8.5mと南側に向かって下がっている。厚さ約15～40cmの表土を掘削し、調査区北側の標高約11.2m付近で15層、17層、18層を、調査区南側標高9.0m付近で20層といった基盤層を検出した。基盤層も現地表面と同じく南西に向かって下がっており、基盤層の上に堆積した土が遺構面を形成している。この基盤層上の堆積土のなかで第1遺構面、第2遺構面遺物包含層、第2遺構面を確認している。



第3図 立ヶ袋遺跡調査範囲図 (S=1:250)



写真2. 土層堆積状況 (東から)



第4図 土層堆積状況図

第2節 第1遺構面 (第7図)

2層、2'層上面に形成される遺構面である。南西向きの斜面で標高約9.8～11.2mを測る。調査区北西側で掘立柱建物跡(SB01)を1棟検出している。出土遺物から中世以降の遺構面と考えられる。

SB01(第5図)

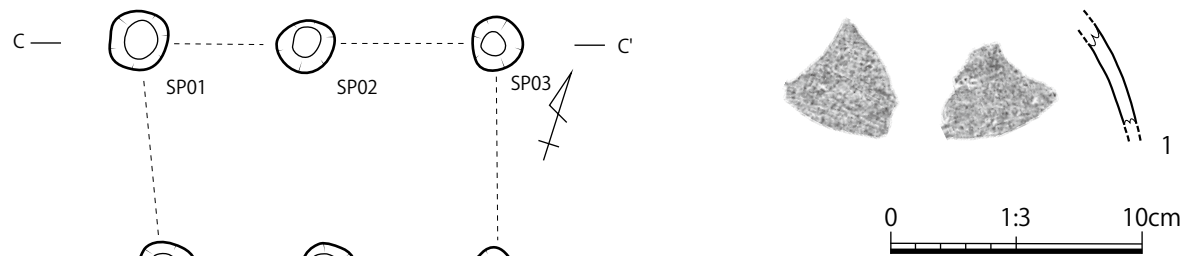
調査区北西側で検出した1間×2間の小規模な掘立柱建物跡である。主軸方向N-107°-Wで、南北方向(梁行)1.48～1.55m×東西方向(桁行)2.23～2.34mを測る。柱間は東西方向C-C'間で2.34m、C-C'のなかでSP01-SP02間は1.08m、SP02-SP03間は1.26mを測る。南北方向D-D'間で2.23m、D-D'のなかでSP04-SP05間は1.08m、SP05-SP06間は1.15mを測る。柱穴はいずれも平面円形で、直径40cm前後、深さは8～10cm程度と浅いものである。柱穴が浅いこと、遺構面の直上に表土が存在するため、実際に建物が存在した面は削平を受けている可能性がある。

桁行が斜面と直行するような恰好で配置されていることや建物自体の規模が小さいことなどから、一般的な住居というよりは簡易な施設といった印象である。

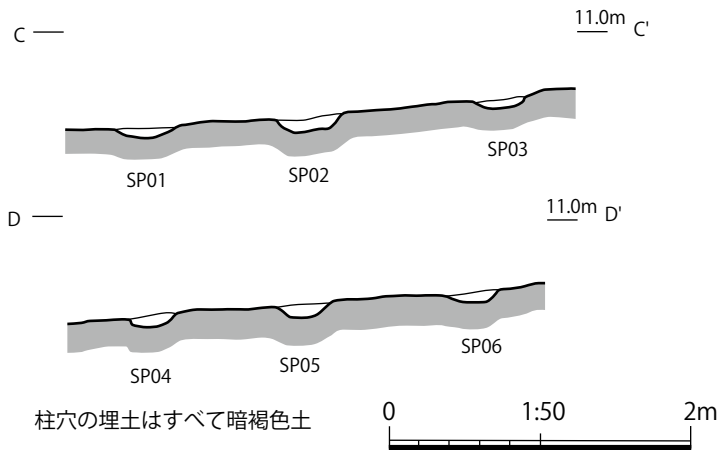
第1遺構面出土遺物(第6図)

遺構に伴う遺物はなく、第1遺構面直上で遺物が1点出土している。

6-1は¹⁾ 瓷器系陶器の甕片と思われる。中世以降のものと思われる。



第6図 第1遺構面出土遺物図



第5図 SB01平面・断面図



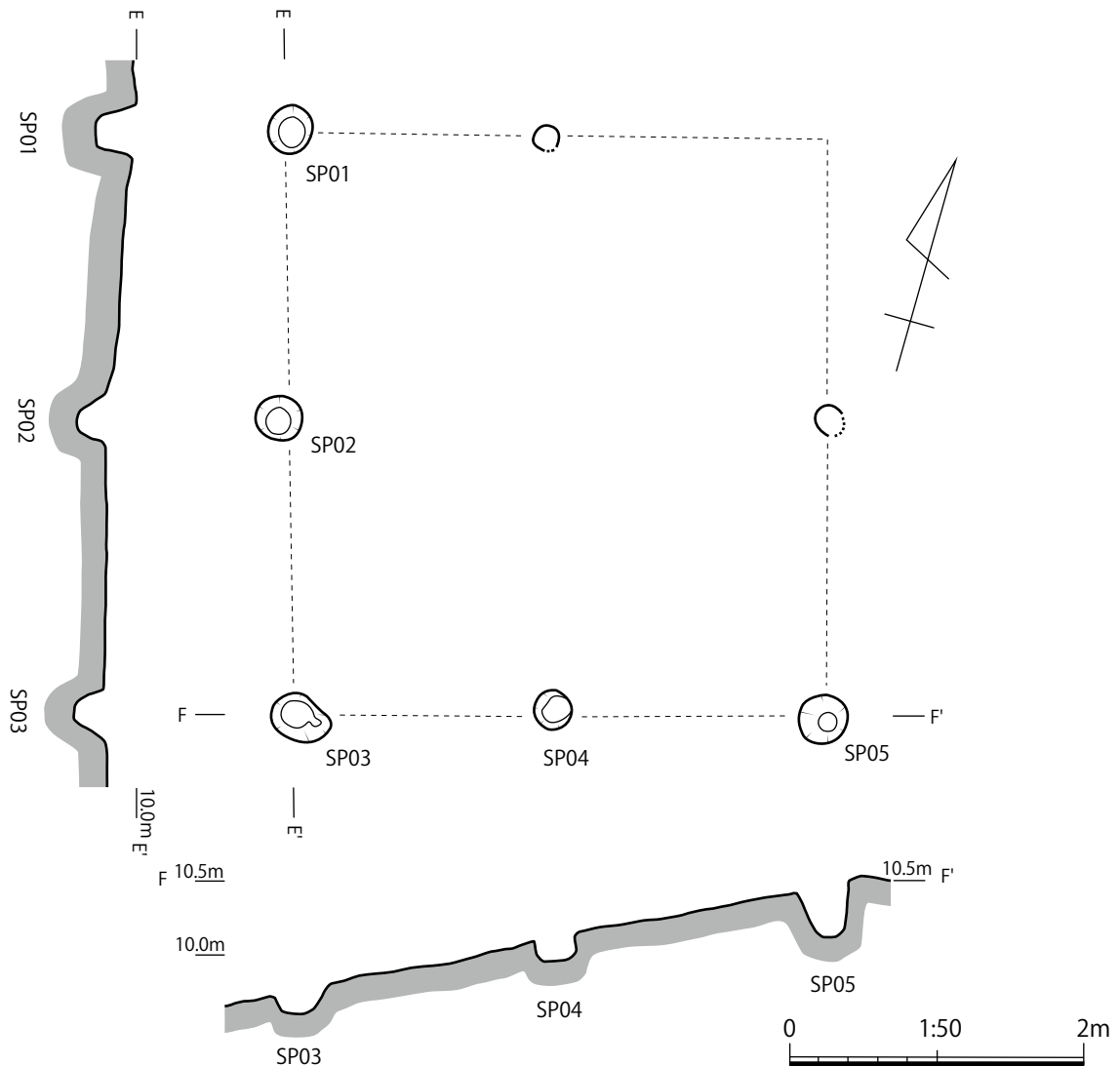
第7図 第1遺構面 遺構位置図

第3節 第2遺構面 (第9図)

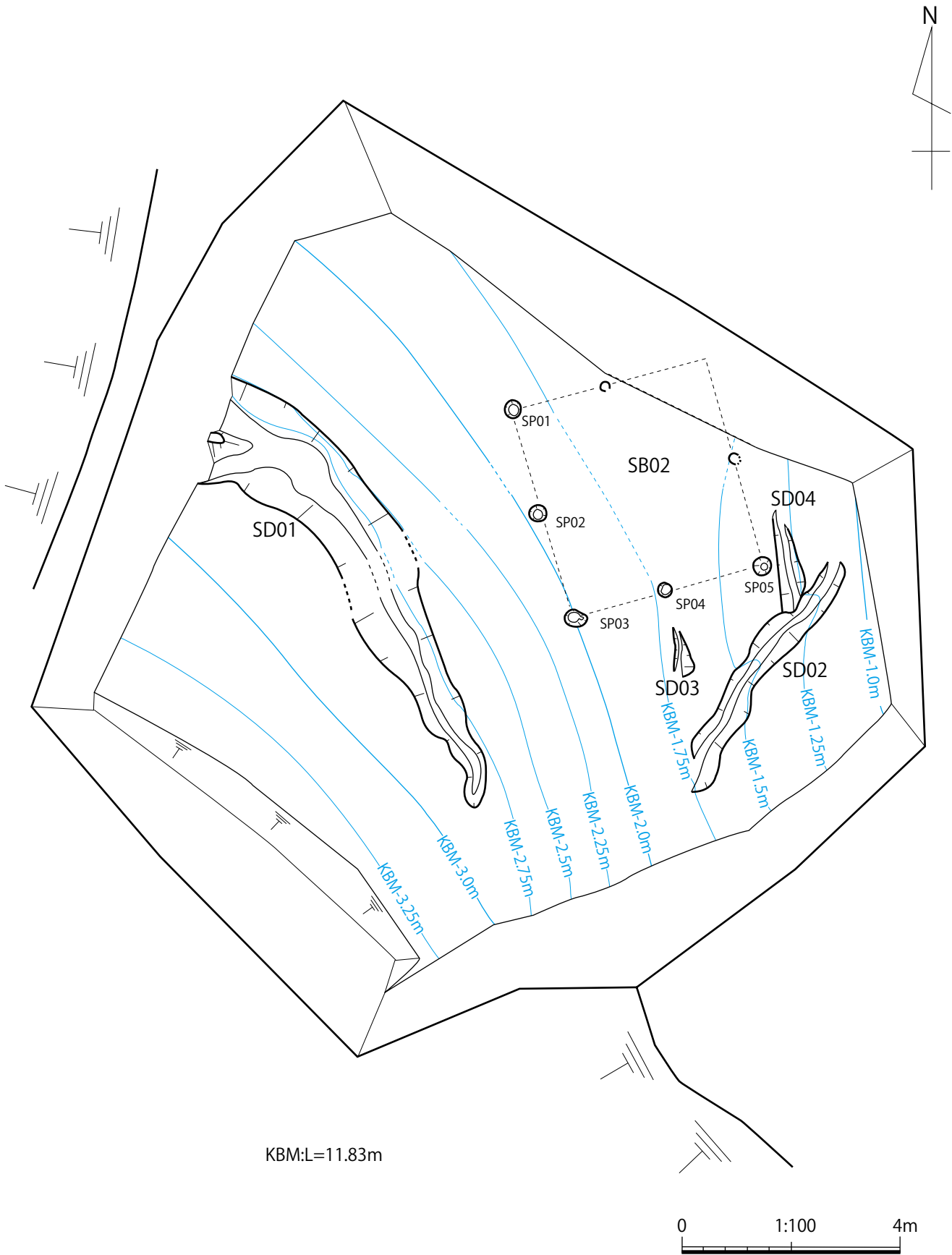
9層、15層、20層を基盤とする遺構面である。南西向き¹の緩斜面で標高約8.7～11.2mを測る。調査区北側に掘立柱建物跡(SB02)を1棟検出しているほか、この周辺に素掘り溝(SD01～SD04)を検出している。SD01、SD03に伴う出土遺物と遺物包含層(6層、6'層)の出土遺物から、縄文時代から古代末にかけての遺構面と考えられる。

SB02(第8図)

調査区北側で検出した2間×2間と想定される掘立柱建物跡である。建物跡の北東隅は調査区外にあたるため、柱穴を検出できていない。主軸方向N-15°-Wで、南北方向3.90m×東西方向3.60mである。柱間は南北方向で1.95m、東西方向で1.81mを測る。柱穴はSP03が平面楕円形で長軸45cm、短軸32cmを測り、それ以外は平面円形を呈する。SP01、SP02、SP05は直径約35cmを測り、SP04のみ直径約30cmとやや小ぶりの柱穴である。E-E'ラインにあるSP01～SP03の柱穴の深さは25cm、20cm、18cmと大きくは変わらない。F-F'ラインにあるSP03～SP05では深さが18cm、



第8図 SB02 平面・断面図



第9図 第2遺構面 遺構位置図

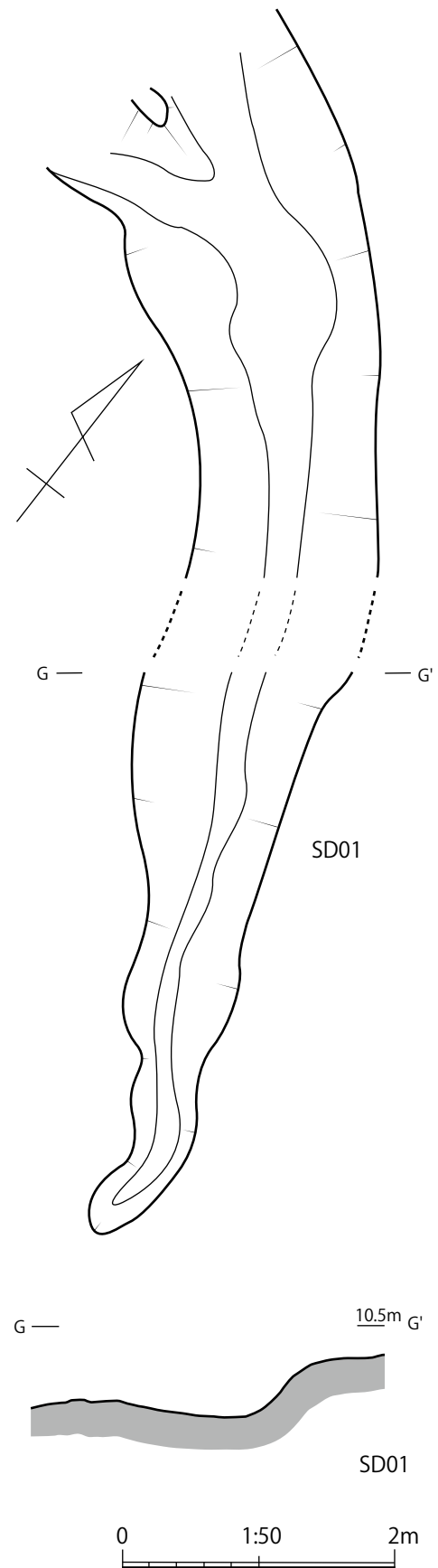
15cm、35cmで、SP03とSP05では柱穴底部の標高で、約50cmの比高差がある。

これらの柱穴からの出土遺物はない。

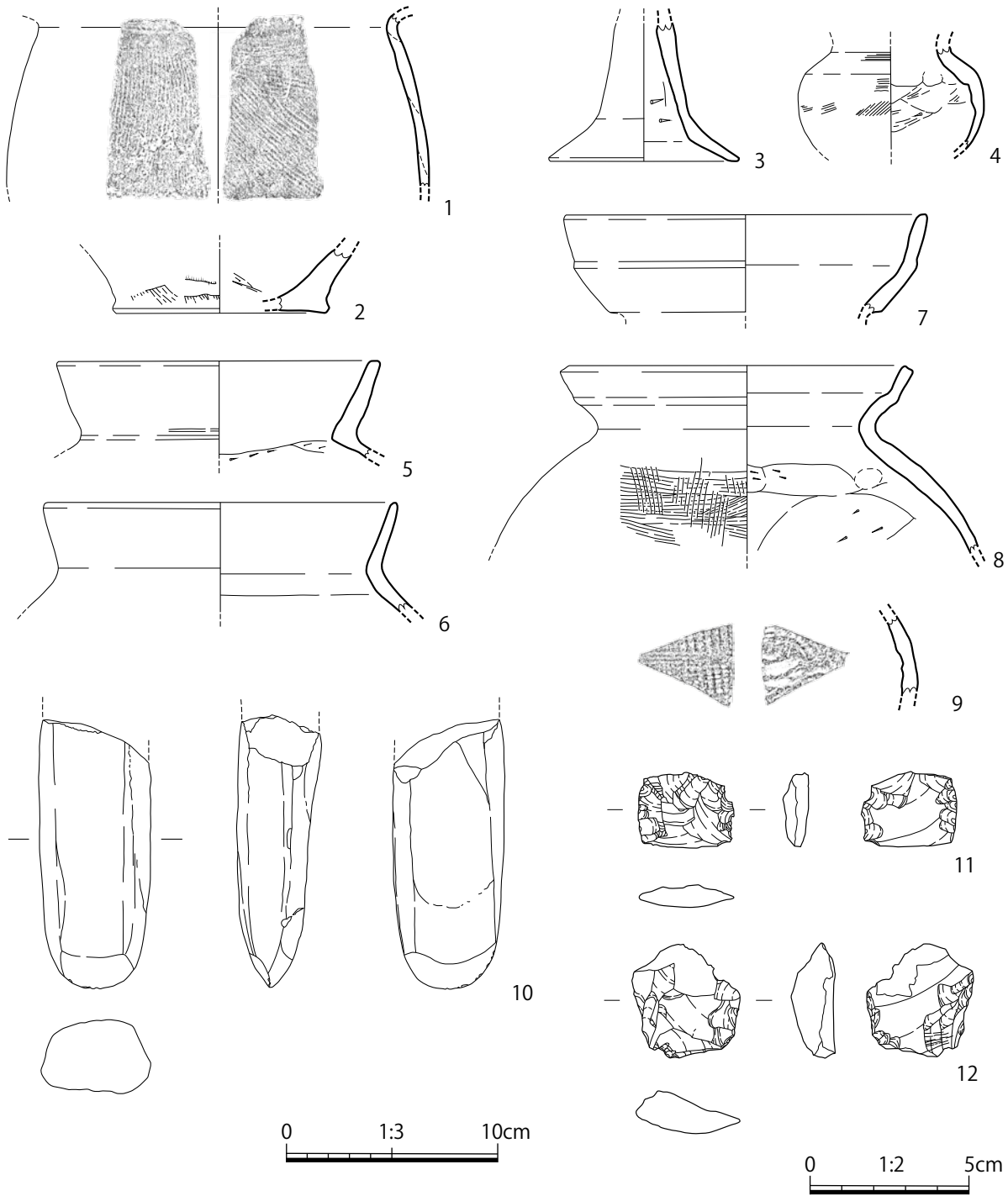
SD01(第10図)

SB02の南西側に位置する素掘り溝である。南端で先細りになり終息しているが、北西側に向かって調査区外へ伸びている。SB02の主軸に沿うように南北に長く存在するものの、調査区西端で西向きに屈曲するため、SB02を意識して設けられたものではないようである。幅0.4～2.1m、深さ30～35cm、断面U字状を呈する。埋土は小礫を多く含んだ土石流状の土砂で一気に埋まった印象である。埋土からは弥生土器の甕片、古墳時代の土師器、須恵器のほか、石器が出土している。

SD01 出土遺物(第11図) 11-1は弥生土器の甕で、外面はタテハケ、内面はヨコハケとナナメハケが施される。松本編年Ⅲ様式の弥生時代中期にあたるものである。11-2は弥生土器の壺あるいは甕の底部である。外面にハケ目が残る。11-3は土師器の高坏で、坏部が欠損し脚部のみが残る。脚部端部に向かって直線状に開き強く屈曲する。11-4は土師器の小型丸底壺である。外面にハケ目が若干残っている。内面には肩部と体部の間に指頭圧痕、その下にケズリが施される。松山編年Ⅱ期の大東式で古墳時代中期前半のものと思われる。11-5は土師器の単純口縁の甕である。外面頸部に若干ヨコハケが残る。内面は頸部以下にケズリが施される。松山編年Ⅱ期大東式で古墳時代中期前半のものである。11-6も土師器の単純口縁の甕で、11-5と同様の時期のものと考えられる。11-7は土師器の甕で、複合口縁の段部の突出が鈍く、端部がやや外反する。松山編年Ⅱ期あるいはⅢ期で古墳時代中期前半のものである。11-8も土師器の甕で、複合口縁の立ち上がりが11-7よりも短い。外面肩部にヨコハケ後、タテハケを施す。内面は頸部よりやや下からケズリを施す。松山編年Ⅱ期あるいはⅢ期で古墳時代中期前半のものである。11-9は古墳時代の須恵器甕の体部で、外面は格子目タタキ、内面は同心円状のタタキが施される。11-10は磨製石斧である²⁾



第10図 SD01平面・断面図

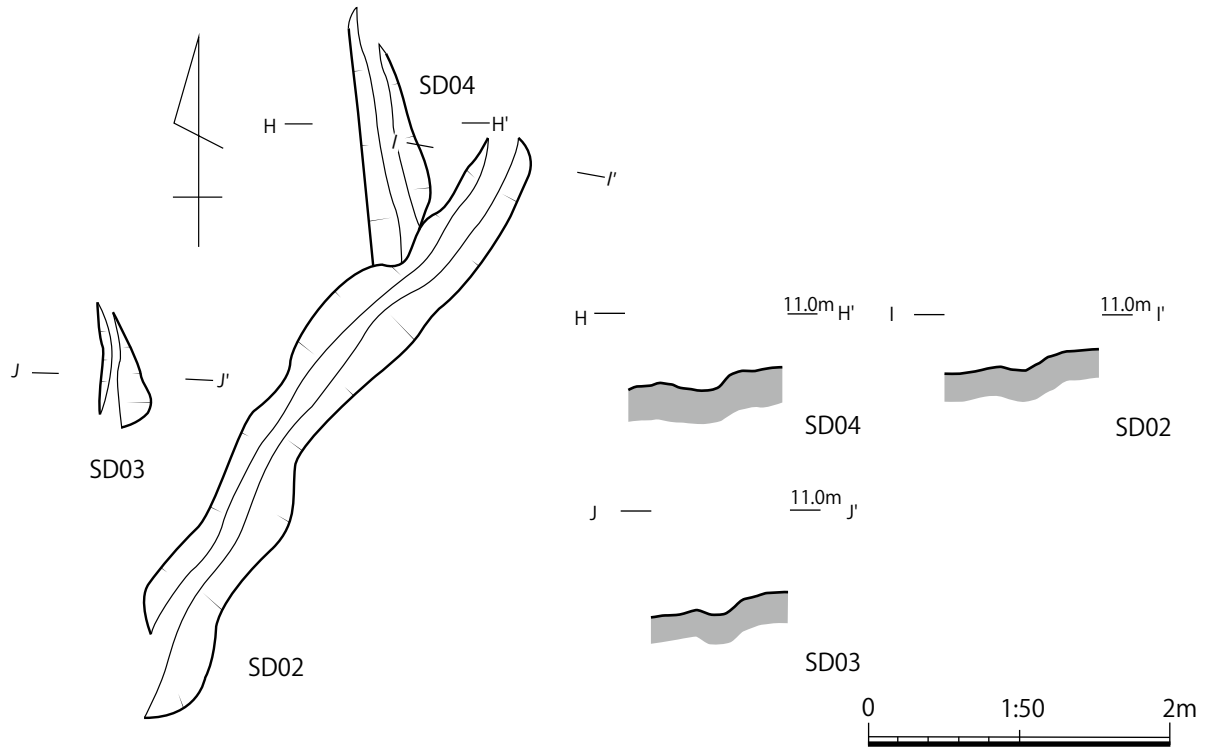


第11図 第2遺構面 SD01 出土遺物図

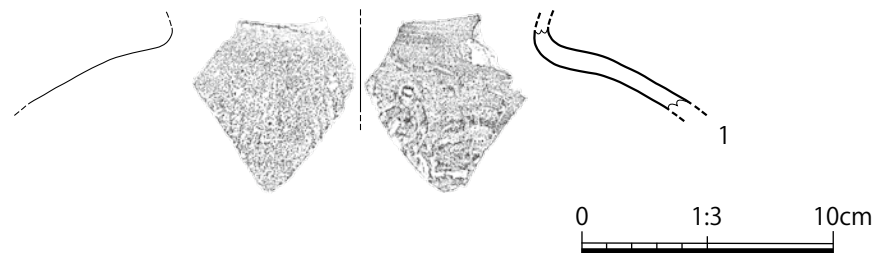
11-11、12は黒曜石製のスクレイパーである³⁾。11-12の上部は二次的な加工を受けている⁴⁾

SD02～SD04(第12図)

SD02は標高約10.1～10.7mに位置する南北方向に長い素掘り溝である。主軸はSB02と異なるため、SB02に伴うものではない。幅0.45～0.7mで深さ15cm程度の浅いものであり、自然流路の可能性も否定できない。この遺構からの出土遺物はない。SD03は標高約10.5～10.6mに位置し、南北方向に長軸をもつ全長1.0m弱の素掘り溝である。幅0.15～0.4m、深さ10cm程度と浅く、自然流路の可能性も考えられる。須恵器の甕片が1点出土している。SD04は標高約10.2mに位置す



第12図 SD02～SD04 平面・断面図



第13図 第2遺構面 SD03 出土遺物図

る南北に長軸をもつ全長 2.0m 程度の素掘り溝で、溝の南端は SD02 と切り合っている。幅 0.25 ～ 0.5m、深さ 10cm 程度と浅く、自然流路の可能性も考えられる。

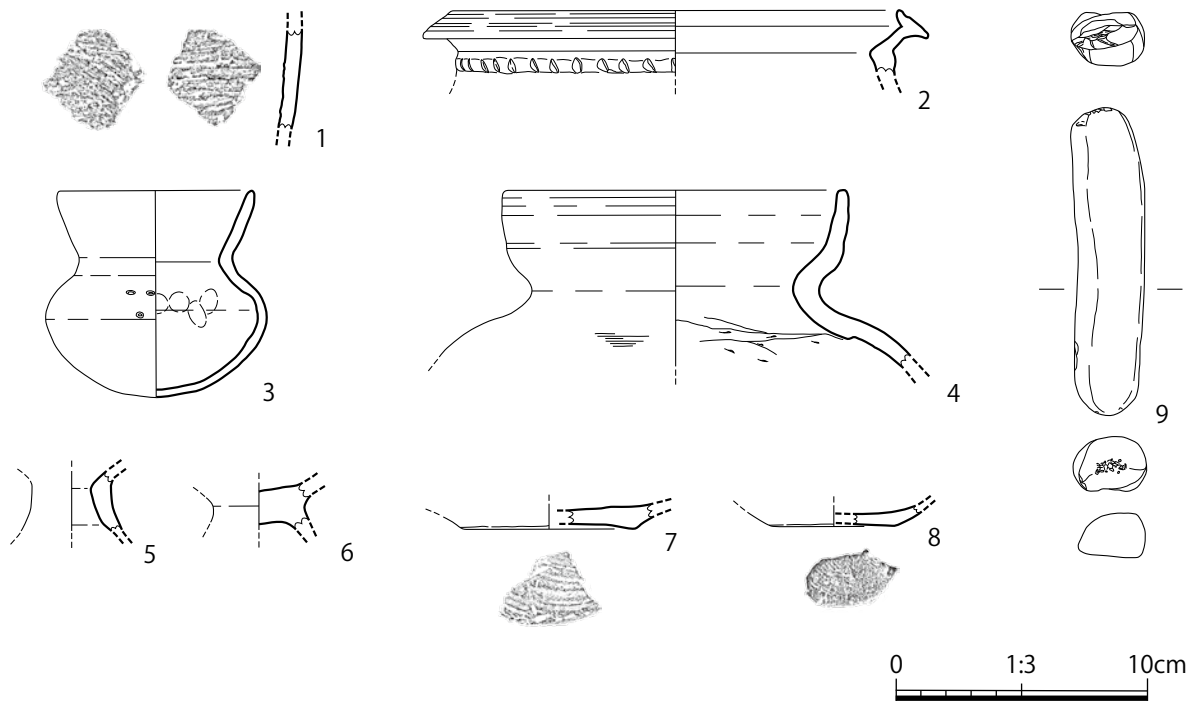
SD03 出土遺物 (第13図) 13-1 は古墳時代の須恵器の甕である。外面に格子目タタキが残り、自然釉が薄くかかる。内面は同心円状のタタキが施される。

第2遺構面遺物包含層出土遺物 (第14図)

第2遺構面直上の6層、6'層から出土した遺物である。

14-1 は縄文土器の粗製深鉢片で、内外面に条痕を残す。14-2 は弥生土器の甕で、口縁部拡張部に凹線文、頸部に指頭圧痕文帯を巡らせるものである。松山編年IV-1 様式で弥生時代中期後葉のものである。14-3 は土師器の小型丸底壺である。外面に3点の刺突が認められる。内面の胴部屈曲部に指頭圧痕が残る。松山編年Ⅱ期大東式で古墳時代中期前半にあたるものと考えられる。14-4 は土師器の甕で、複合口縁の段部の突出がかなり退化している。外面肩部にヨコハケが若干残る。内面頸部よりやや下からケズリが施される。松山編年Ⅱ期あるいはⅢ期で古墳時代中期前半にあたるものであ

る。14-5、6は土師器の製塩土器の脚部付近と思われる⁵⁾。14-5は内外面に火を受けた痕跡が認められる。14-7は古代の須恵器の皿で、底部に糸切り痕が残る。出雲国府第2または第3型式にあたる7世紀末葉から8世紀第2四半期のものと思われる。14-8は土師質土器皿で、出雲国府第7～10型式の10世紀前半～12世紀後半までのものと思われる。14-9はたたき石である。両端部に敲打痕が残る。



第14図 第2遺構面 遺物包含層出土遺物図

註1) 西尾克己氏の御教示による。

註2～3) 稲田陽介氏の御教示による。

註4) 稲田陽介氏の御教示による。稲田氏によれば、一度使用された石器が後の時代に再度加工を施されたものとされている。

註5) 立ヶ袋遺跡と同じ森山地区にある伊屋谷遺跡、郷の坪遺跡出土の製塩土器のなかに類似するものがある。

松本岩雄 1986「第1章 美保関の考古資料」『美保関町誌 下巻』美保関町誌編さん委員会

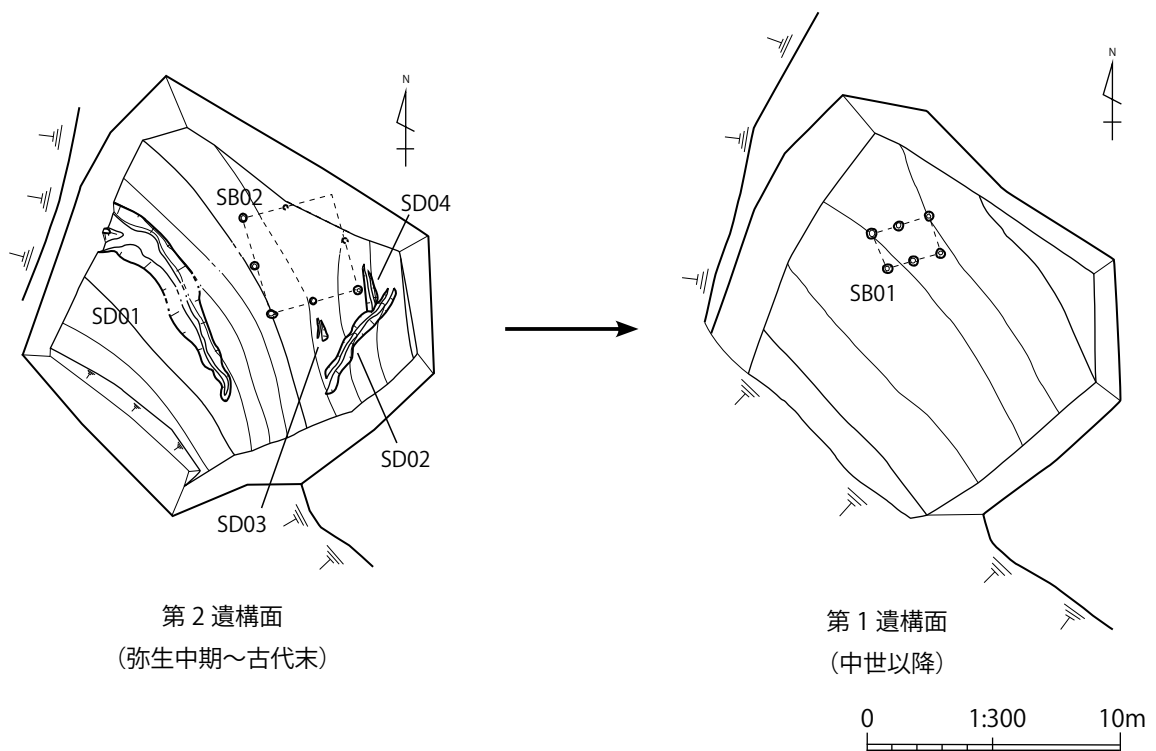
第4章 総括

今回発掘調査をした立ヶ袋遺跡では2面の遺構面を検出し、第1遺構面で1間×2間の掘立柱建物跡1棟を確認し、出土遺物から中世以降に存在した遺構面であることが判明した。第2遺構面では2間×2間の掘立柱建物跡1棟の存在が確認できた。第2遺構面検出の柱穴からは時期を特定できる遺物の出土はないが、その他の遺構あるいは遺構面を覆う遺物包含層から出土した遺物は縄文時代から古代末のものが出土している。なかでも古墳時代中期にあたるものが多いため、この時期を中心とする遺跡と考えられる。

美保関町内での建物跡の検出例は少なく、最も古いもので千酌^{じやんたく}太田遺跡¹⁾で弥生時代後期の竪穴建物跡が1棟、千酌中殿遺跡²⁾で8世紀から9世紀代の2間×3間の掘立柱建物跡、尾崎遺跡³⁾で8世紀後半の礎盤建物跡、礎石建物跡が見つかる程度である。

ただし、立ヶ袋遺跡が存在する森山地区では、郷の坪遺跡、伊屋谷遺跡から大量の製塩土器が出土している⁴⁾。美保関町では農耕に適した平野部が少ないにもかかわらず、有力者でなければ造営不可能である横穴式石室が多く分布していることから、農耕主体の集団ではなく製塩や漁労を生業とした集団の存在が窺える⁵⁾。立ヶ袋遺跡でも今回の調査で製塩土器がわずかに出土しており、製塩を生業とした集団の存在を示唆するものと思われる。

さらに、立ヶ袋遺跡は『出雲国風土記』島根郡条に見える「戸江割」^{とのえせき}の推定地から東に約1.2kmの距離にあり、遺構面に伴わないものの7世紀末から8世紀第2四半期にかけての須恵器皿が1点出



第15図 立ヶ袋遺跡 遺構変遷図

土している。また立ヶ袋遺跡から西に約 1.8km離れた尾崎遺跡で「門家」と書かれた墨書土器とともに 8 世紀後半の建物跡が見つかっており、何らかの拠点施設が想定されている。⁶⁾尾崎遺跡は戸江割^{とのえせき}の推定地から西に約 1.1kmと、立ヶ袋遺跡も尾崎遺跡も戸江割^{とのえせき}の推定地までの距離は大きく変わらないため、立ヶ袋遺跡のほかこの周辺でも同時期の集落の存在が期待できるのではないだろうか。

以上のように、今回の発掘調査により、美保関町内では今まであまり確認されなかった縄文時代から中世以降にかけての集落の様相を一端ではあるが把握できた。

美保関町では以前より古墳の存在は多く知られていたものの、これらを造営したであろう集団の集落跡については、ほとんど発見はされてこなかった。今回は狭小な緩斜面にもかかわらず集落の痕跡を検出することができ、当時の人々が地理的な制約のもと狭小な緩斜面を利用しながら生活をしてきた様子が窺える。今後もこのような土地の利用状況について注目していく必要がある。

註 1) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2010「第 3 章 第 5 節 附編 千酌太田遺跡発掘調査報告」『千酌条里制遺跡他発掘調査報告書』

註 2) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2010「第 3 章 第 2-2 節 平成 20 年度中殿遺跡の調査」『千酌条里制遺跡他発掘調査報告書』

註 3) 平石充 2009『尾崎遺跡』島根県教育委員会、中国電力株式会社

平石充 2012「第 5 章 奈良・平安時代 尾崎遺跡」『松江市史 史料編 2 考古資料』松江市史編纂委員会

註 4) 松本岩雄 1986「第 7 編 第 1 章 美保関の考古資料」『美保関町誌 下巻』美保関町誌編さん委員会

註 5) 松本岩雄 1986「第 2 編 第 1 章 第 4-7 節 古墳時代の生産」『美保関町誌 上巻』美保関町誌編さん委員会

註 6) 註 3) と同じ

表1. 遺物観察表

遺物 番号	遺構面	遺構名	種別	器種	法量：cm(残存値)			色調	胎土	遺存	焼成	備考
					口径	器高	底径					
6-1	第1遺構面		瓷器系陶器	甗か	—	(4.1)	—	灰褐色 7.5YR5/2	1mm以下の砂粒 微量に含む	小片	良好	
11-1	第2遺構面	SD01	弥生土器	甗	—	(8.2)	—	灰白色 10YR8/2	1mm以下の砂粒 若干含む	小片	不良	
11-2	第2遺構面	SD01	弥生土器	壺か甗	—	(3.0)	(9.8)	橙色 7.5YR6/6	1mm以下の石英 ・長石若干含む	底部1/4	良好	
11-3	第2遺構面	SD01	土師器	高坏	—	(6.5)	(9.0)	黄橙色 7.5YR7/8	2mm以下の石英 ・長石含む	脚部3/5	良好	
11-4	第2遺構面	SD01	土師器	小型丸底壺	—	(4.8)	—	橙色 7.5YR6/8	1mm以下の石英 ・長石含む	胴部	良好	
11-5	第2遺構面	SD01	土師器	甗	(15.2)	(4.6)	—	橙色 5YR6/6	1mm以下の長石 若干含む	口縁部1/5	良好	単純口縁
11-6	第2遺構面	SD01	土師器	甗	—	(5.1)	—	にぶい黄橙色 10YR7/3	3mm以下の砂粒 含む	小片	良好	単純口縁
11-7	第2遺構面	SD01	土師器	甗	(17.0)	(4.7)	—	橙色 7.5YR6/8	2mm以下の石英 ・長石含む	口縁部	良好	複合口縁
11-8	第2遺構面	SD01	土師器	甗	(15.8)	(8.9)	—	橙色 7.5YR6/6	1mm以下の石英 ・長石含む	口縁部1/4	良好	複合口縁
11-9	第2遺構面	SD01	須恵器	甗	—	(3.6)	—	黒褐色 7.5YR3/1	1mm以下の砂粒 微量に含む	小片	良好	
11-10	第2遺構面	SD01	石器	磨製石斧	長(12.7)/幅5.3/厚3.9 重量401.9 g			灰白色 5Y8/1				
11-11	第2遺構面	SD01	石器	スクレイパー	長2.3/幅3.0/厚0.8 重量6.13 g							黒曜石製
11-12	第2遺構面	SD01	石器	スクレイパー	長3.6/幅3.4/厚1.4 重量14.14 g							黒曜石製
13-1	第2遺構面	SD03	須恵器	甗	—	(3.4)	—	灰色 7.5Y6/1	1mm以下の砂粒 微量に含む		良好	
14-1	第2遺構面	包含層	縄文土器	深鉢	—	(4.0)	—	暗褐色 10YR3/3	1mm程度の砂粒 多く含む	小片	良好	
14-2	第2遺構面	包含層	弥生土器	甗	(17.6)	(2.6)	—	浅黄色 2.5Y7/3	1mm以下の砂粒 若干含む	口縁部	良好	
14-3	第2遺構面	包含層	土師器	小型丸底壺	(7.6)	8.2	—	橙色 7.5YR6/8	2mm以下の石英 ・長石含む	7/10	良好	
14-4	第2遺構面	包含層	土師器	甗	(13.6)	(7.0)	—	明赤褐色 5YR5/8	1mm以下の長石 若干含む	1/5~1/4	良好	複合口縁
14-5	第2遺構面	包含層	土師器	製塩土器	—	(2.4)	—	橙色 5YR6/8	1mm以下の砂粒 若干含む	底部付近	良好	
14-6	第2遺構面	包含層	土師器	製塩土器	—	(1.9)	—	橙色 5Y6/8	1mm以下 白色砂粒若干含む	小片	良好	
14-7	第2遺構面	包含層	須恵器	皿	—	(1.0)	(6.8)	灰色 7.5Y6/1	1mm以下の砂粒 微量に含む	底部1/4	良好	
14-8	第2遺構面	包含層	土師質土器	皿	—	(0.8)	(5.0)	にぶい橙色 5YR7/4	1mm以下の砂粒 微量に含む	底部1/4	良好	
14-9	第2遺構面	包含層	石器	たたき石	長12.2/幅2.9/厚2.1 重量107.4 g			暗灰色 N31		4/5		

表2. 非掲載石器観察表

	出土地点	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
①	2面SD01	剥片	黒曜石	1.7	1.6	0.35	0.84	
②	2面包含層	剥片	黒曜石	5.0	2.6	0.6	10.15	久美産
③	遺構外	剥片	黒曜石	4.0	2.6	1.2	11.72	2次加工あり
④	遺構外	剥片	黒曜石	2.7	2.5	0.6	5.44	2次加工あり
⑤	遺構外	剥片	黒曜石	3.7	2.25	0.95	6.17	2次加工あり
⑥	遺構外	剥片	黒曜石	1.4	0.4	0.3	0.35	2次加工あり

写真図版



調査開始前状況（南から）



現在の調査地（南から） *左下は横田川



第 1 遺構面 SB01 検出状況 (南西から)



第 1 遺構面 SB01 完掘状況 (南から)



2面遺物包含層検出状況
(北壁)



2面遺物包含層出土遺物
(第14図-3)



2面遺物包含層出土遺物
(第14図-4)



第2遺構面完掘状況(西から)



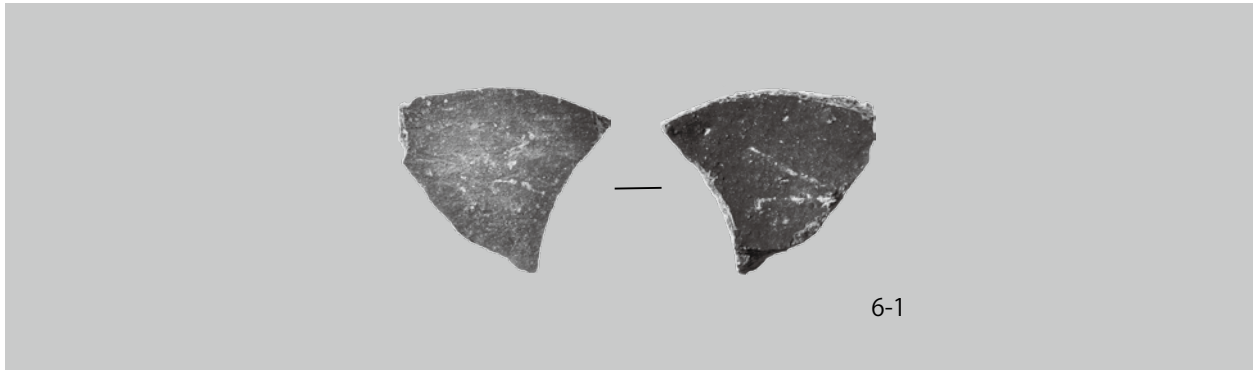
第2遺構面 SD01 完掘状況(南東から)



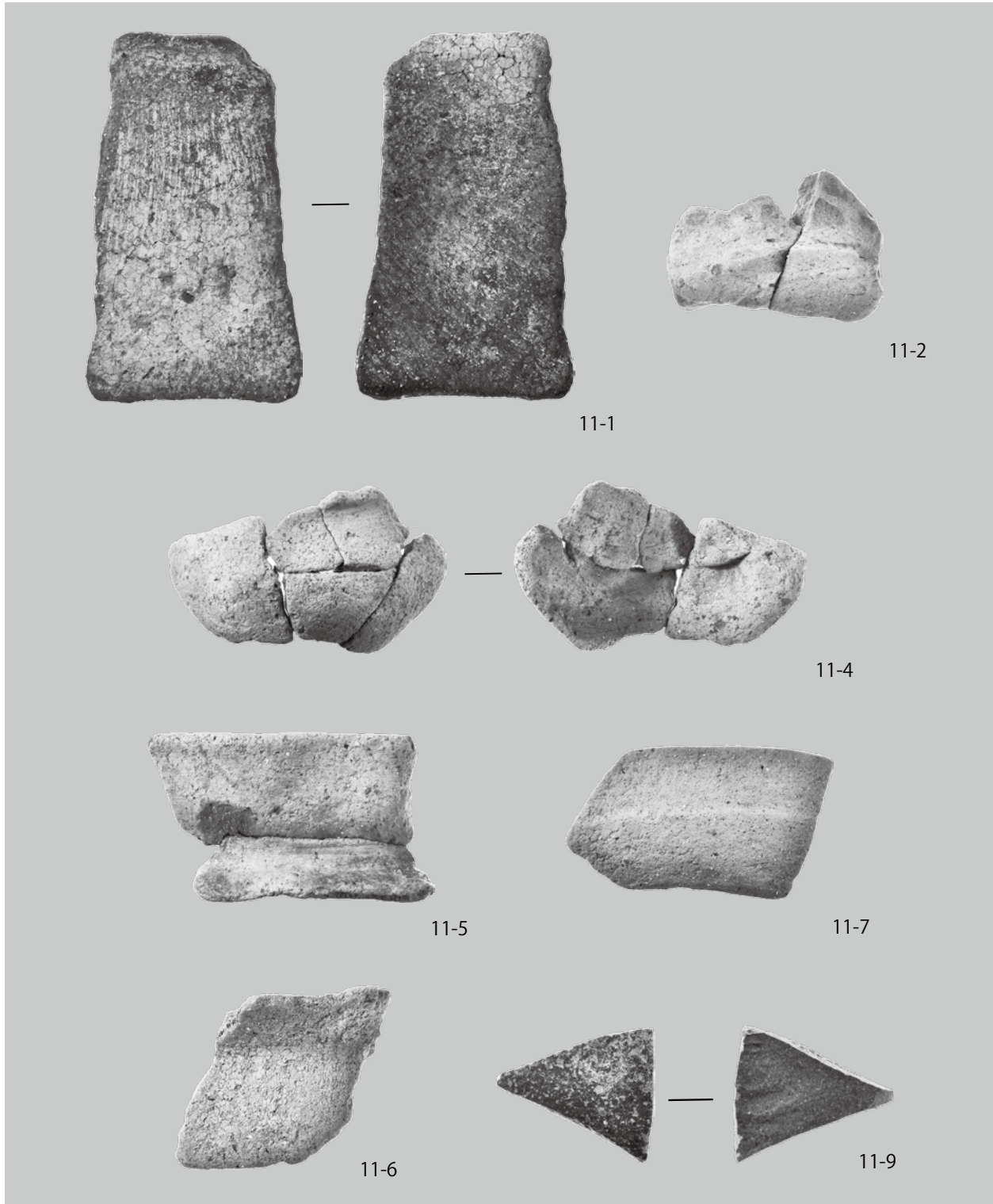
第2遺構面 SD02 完掘状況 (南から)



第2遺構面 SB02 完掘状況 (南から)



第1 遺構面出土遺物



第2 遺構面 SD01 出土遺物 (1)



11-3



11-8

第 2 遺構面 SD01 出土遺物 (2)

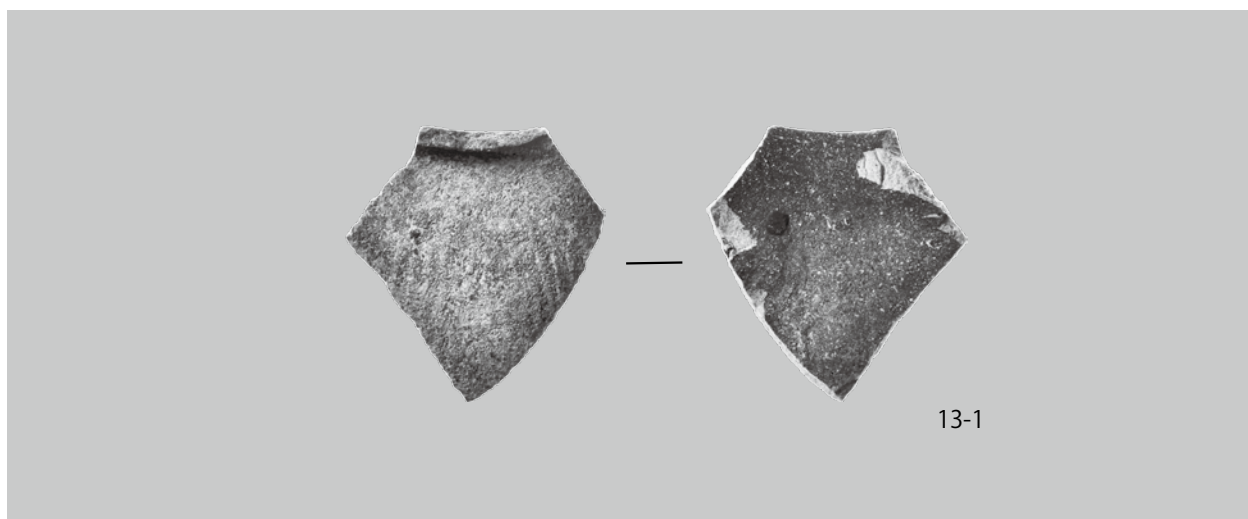


11-11

11-12

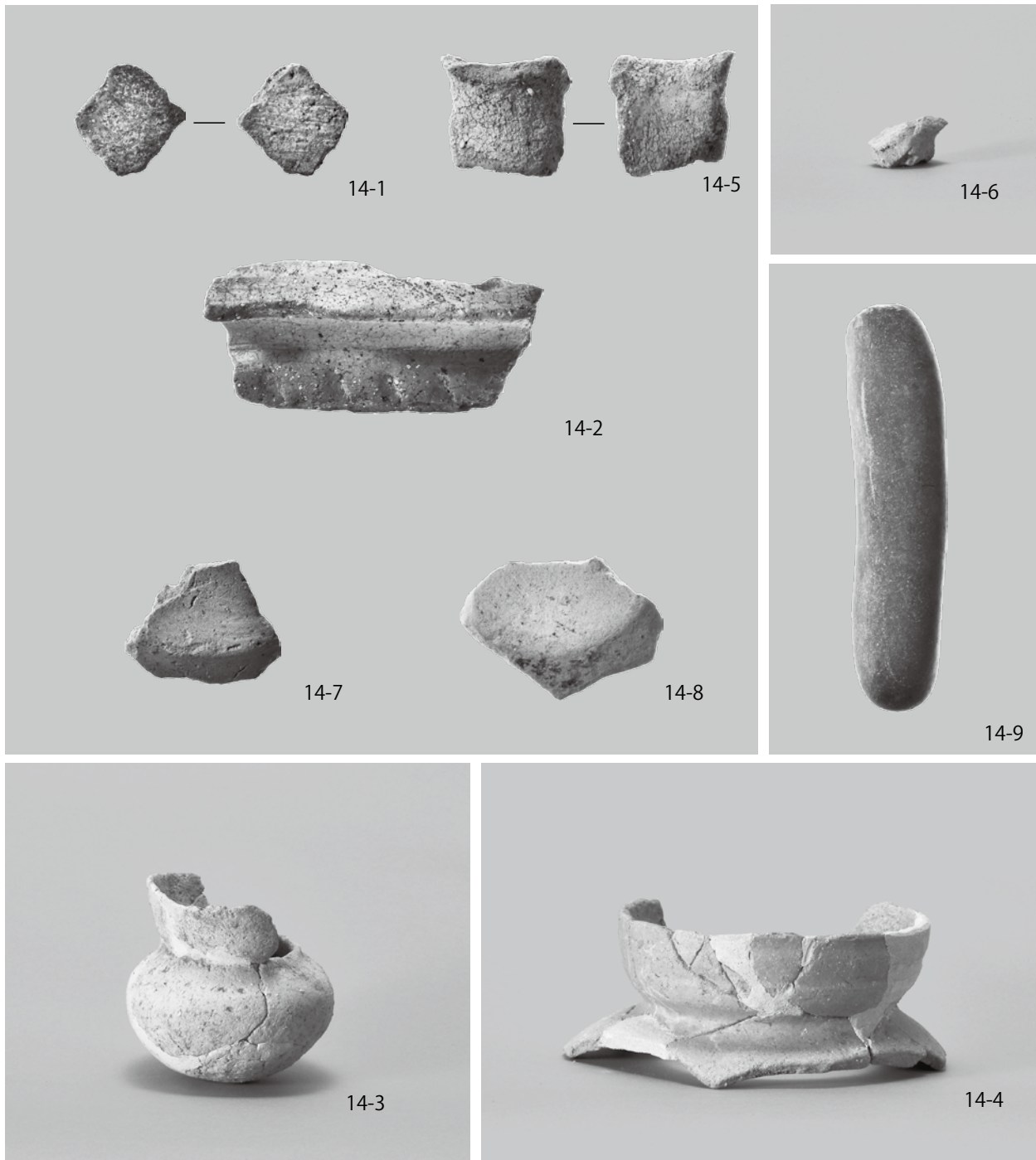
11-10

第 2 遺構面 SD01 出土遺物 (3)



13-1

第 2 遺構面 SD03 出土遺物



第 2 遺構面 遺物包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たちがふくろいせき						
書名	立ヶ袋遺跡						
副書名	島根原子力発電所新規制基準適合性審査に係る敷地周辺陸域地質調査地内埋蔵文化財調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ	第173集						
編著者名	徳永桃代						
編集期間	松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 埋蔵文化財課						
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町 86 番地 まちづくり文化財課 TEL:0852-55-5284 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 埋蔵文化財課 TEL:0852-85-9210						
発行年月	2016(平成28)年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
たちがふくろいせき 立ヶ袋遺跡	まつえし 松江市 みほのせきちょう 美保関町 もりやま 森山259-1 260	32201	I-109	35° 32' 34" 140° 52' 11"	20140917 ～ 20140926	184.3 m ²	地質調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
たちがふくろいせき 立ヶ袋遺跡	集落遺跡	縄文時代 ～ 中世以降	掘立柱建物跡 溝	弥生土器、土師器 須恵器、石器	2つの遺構面を検出し、それぞれの面で掘立柱建物跡を検出した。		
要約	立ヶ袋遺跡は松江市美保関町森山に存在する遺跡である。 古墳時代中期を中心とした遺跡であるが、縄文時代の土器も1点出土している。 製塩土器もわずかに出土しており、同じ森山地区で製塩土器が大量に出土した伊屋谷遺跡、郷の坪遺跡があることから、製塩が遺跡周辺で生業となっていた可能性が考えられる。 美保関町内での建物跡の検出例は少なく、この時期の集落の様子を知る貴重な成果である。						

松江市文化財調査報告書 第173集

島根原子力発電所新規制基準適合性審査に係る
敷地周辺陸域地質調査地内埋蔵文化財調査報告書

立ヶ袋遺跡

平成28(2016)年3月

編集・発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

印刷 有限会社黒潮社